様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成２４年５月３１日現在

機関番号：３２６４４
研究種目：基盤研究（Ｃ）
研究期間：２００９　～２０１１
課題番号：２１５９２７２０

研究課題名（和文）　新人看護師に対するフィジカルアセスメント研修プログラムの開発に関する研究

研究課題名（英文）　Research on the Development of the Physical Assessment Training Program for Fresh Nurses

研究代表者
城生　弘美（JONO　HIROMI）
東海大学・健康科学部・教授
研究者番号：６０２４７３０１

研究成果の概要（和文）：複数の看護テキストから全身の身体審査（フィジカルアセスメント）項目を抽出し一覧表を作成した。この一覧表を元に、各年度の新人看護師を対象に３か月毎の実施状況を把握した。その結果、どの年度においても就職早々から一人で自信を持って実施できる身体審査項目はバイタルサイン測定・身長・体重・SpO_2であり、測定結果を数字で表記できる項目であった。一年を経過しても自信なく実施している項目は、呼吸音聴取等の五感を用いて判断する項目であった。したがって、新人看護師の研修においては、五感を用いて識別する項目、特に音を取り上げ実施する必要性が示唆された。

研究成果の概要（英文）：Full body physical assessment criteria were selected from multiple nursing textbooks and made into a list. Based on this list, fresh nurses for each fiscal year were surveyed every three months to ascertain their comfort with the physical assessment. Results showed that regardless of the fiscal year, measurement that can be expressed with numbers, such as vital signs, height, weight and SpO_2, was the physical assessment criteria that nurses were comfortable measuring by themselves immediately from the start of employment. Criteria that they did not feel comfortable measuring by themselves even after one year were criteria that required the use of the five senses, such as listening to breath sounds. This suggests the need to implement criteria that employ the five senses, in particular those that relate to listening to sounds, in fresh nurse trainings.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
２００９年度	2,700,000	810,000	3,510,000
２０１０年度	600,000	180,000	780,000
２０１１年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
総　計	3,800,000	1,140,000	4,940,000

研究分野：医歯薬学
科研費の分科・細目：看護学・基礎看護学
キーワード：フィジカルアセスメント、新人看護師、研修プログラム

１．研究開始当初の背景

(1)2007 年の第 5 次医療法改正以降の医療の改革において、看護職者の「状況に合わせた的確な看護判断」「確実な看護技術の提供」

の実践能力がますます必要とされるようになった。的確な看護判断のための基本的能力として「フィジカルアセスメント」が注目され、2008 年のカリキュラム改正において、看護基礎教育の中で強化すべき項目であると推奨された。

(2)先行研究においては、看護基礎教育にどのように導入するか、導入した結果学生にはどのような能力が培われたか等、教育内容の精選に関する研究が多かった。一方現場の看護師に対する研究は、実践現場の看護師のニーズは何か、実施されているフィジカルアセスメント項目は何か、等の研究が始められたところであった。

(3)本研究者は 2005 年と 2006 年において、地域中核病院 395 床の内科病棟において、看護師 10 名の日常業務の中で実施しているフィジカルアセスメント項目を参加観察法および聞き取り調査により把握した。その結果、実践現場で看護師が行っているフィジカルアセスメントは、問診項目については施設独自の基礎情報用紙に沿って一定レベルの情報が把握されていたが、視診・触診・打診・聴診項目に関しては、個々の看護師の知識レベルに任されている状況であることを示した。

(4)新人看護師に関する問題の一つに就職後約 1 割が一年未満で退職をすること、また看護基礎教育卒業時の看護実践能力の低下等が挙げられ、2003 年より厚生労働省において「新人看護職員の臨牀実践能力の向上に関する検討会」が開始された。

以上の背景を踏まえ、対象者を新人看護師とし、それぞれの研究年度で新人看護師がどのようにフィジカルアセスメント能力を獲得していくか経時的に把握し、どのような研修プログラムが必要かについて研究を進めることとした。

２．研究の目的

(1)2009 年度は、新人看護師それぞれの勤務場所において、就職後から経時的にどのようなフィジカルアセスメント項目がいつ頃から自信を持ってできるようになるか、自信が持てずに実施している項目は何か、またほとんど実施しない項目は何かについての実態把握を目的とした。

(2)2010 年度は、 (1)で得られた項目の中でどの勤務場所でも実施頻度が高いフィジカルアセスメント項目を挙げ、研修プログラムを作成し企画運営する。その後研修を受講した新人看護師を対象に研修で学んだことの有効性と、研修に組みこまなかったフィジカルアセスメント項目について、勤務場所による実施状況を経時的に把握することを目的とした。

(3)2011 年度は 2010 年度に行った研修プログラムの内容を精選し、新たに就職した新人看護師に対し研修の企画運営を行った。その後、経時的に聞き取り調査を実施し、研修を受講した新人看護師を対象に研修で学んだことの有効性と研修に組み入れなかったフィジカルアセスメント項目について、勤務場所による実施状況を経時的に把握し、より必要とされるフィジカルアセスメント研修プログラム内容について検討することを目的とした。

３．研究の方法

(1)2009 年度は、同じ看護基礎教育機関を卒業した新人看護師の中で、本研究協力に承諾の得られた者 9 名を対象とし、3 月に面接調査を実施した。面接調査は、既存の「ヘルスアセスメント」「フィジカルアセスメント」に関連する複数のテキストに共通して記載されている全身のアセスメント項目を一覧表にしたものを用い、就職直後から 3 か月ごとに振り返ってもらい、個々のフィジカルアセスメント項目について、勤務病棟での実施の際に自信をもってできる項目・戸惑う項目・判断に迷う項目・実施しにくい項目、また先輩看護師から指導されたことや評価されたこと等について述べてもらった。同時にフィジカルアセスメント項目一覧表の各項目に就職直後から 3 か月ごとに実施状況を記載してもらった。また、対象者の属性に関する情報について項目を列挙した用紙に記入してもらった。さらに面接内容は逐語録を起こし、意味内容別にカテゴリー化を行った。

(2)2010 年度は、4 月 1 日付で 359 床の公立病院に就職をした新人看護師 20 名に対し、7 月 28 日に看護部主催の新人看護師研修プログラムの中で 60 分「呼吸器系のフィジカルアセスメント」を企画運営した。内容は「呼吸器系の解剖学・生理学を踏まえた看護師の行う呼吸器系、特に肺の観察技術」に関する講義 45 分、演習 15 分を実施した。研修後協力の得られた 5 名に対し、研修内容が活用できたか、活用できない場合何が原因と考えるか、自信をもって呼吸音がわかるためには何が必要と考えるか等について面接を行った。

(3)2011 年度は、2010 年度と同様の施設において、新人看護師 13 名を対象に 7 月 27 日に 60 分の研修を実施した。研修内容は 2010 年

度に実施した内容の精選を行い、講義 45 分の中に実際の呼吸音を複数回聞かせるようにし、その後自分の呼吸音やそばにいる同僚の呼吸音を聞くような演習 10 分実施した。研修終了直後、2009 年度に作成したフィジカルアセスメント項目一覧表に就職後 4 か月目を終了する 7 月末現在での自分の実施状況について記載してもらった。記載の際には就職直後も思い出してもらいながら「一人で不安なく実施できる」「先輩に確認すれば一人でできる」「一人での実施は不安がある」「実施の機会がない」を個々のフィジカルアセスメント項目に記載してもらった。その後、2011 年 11 月～2012 年 2 月までの間で面接研究協力の承諾の得られた看護師 8 名に対し、45 分程度の面接を行い、研修後のフィジカルアセスメント実施状況とそれに伴う不安等について語ってもらった。

４．研究成果

(1)2009 年度は、研究協力の得られた対象者が 9 名で、勤務施設は国公立が 8 名、私立が 1 名であった。そのうち内科系病棟勤務が 7 名、外科系病棟勤務が 2 名であった。年齢はいずれも 23 歳であり、男性 2 名、女性 7 名であった。フィジカルアセスメント項目のうち 8 名以上が就職直後から自信を持って実施できたのは、バイタルサイン（体温・脈拍・呼吸・血圧）測定と SpO_2 測定、身長と体重測定であった。聴診項目（呼吸音・心音・腸蠕動音）については、就職直後から不安なく実施できるとしたものが呼吸音の 1 名のみであった。呼吸音や腸蠕動音に関しては、6 か月以降は 6 名が不安なく実施できるようになった。しかし、心音に関しては 1 年を経ようとしている時点で 3 名のみが不安なくできると答えている状況であった。

上記に示すように数字で測定値が明示できるものに関しては、就職直後から不安なく実施できているが、音の聴取のように自分の五感を使って観察する項目については、なかなか不安がとれないことが示唆された。また、顔面のフィジカルアセスメントについては、口腔内の粘膜状況把握は 3 か月以降からできるようになったという者が多かったが、眼・耳・鼻に関する項目は 1 年過ぎても多くが経験する機会がないと答えていた。

(2)2010 年度は、面接協力が得られた対象者は 5 名で、平均年齢は 23.5 歳、男性 1 名、女性 4 名であった。5 名ともに看護基礎教育時代に呼吸器系、特に肺の構造と機能について学習済みであった。呼吸器系のフィジカルアセスメント研修を行ったことで、体表面から見た肋骨と肺の位置関係の確認、呼吸音聴取に関する手技、正常呼吸音と異常呼吸音の判別方法の再確認ができ、日常業務内で常に呼吸音の正常と異常を判別することが必要なため、曖昧にしていた部分を確認でき良かった、即実践できる、との反応であった。

(3)2011 年度は、7 月に行った呼吸器のフィジカルアセスメント研修時に、受講者 13 名に対し、就職直後と 3 か月後の全身のフィジカルアセスメント項目一覧表に「一人で不安なくできる」から「実施の機会がない」までの記述に協力してもらった結果、10 名が就職直後から不安なく実施できていると答えたフィジカルアセスメント項目はバイタルサイン（体温・脈拍・呼吸・血圧）測定と SpO_2 測定、身長と体重測定で 2009 年と同様であった。

面接対象者は研修を受講した 13 名中 8 名で、平均年齢は 24.9 歳、男性 3 名、女性 5 名であった。呼吸器の聴診法は頻回に実施すると全員が回答し、研修で実施した肺の構造を皮膚表面からどのようにイメージするか、また呼吸音の実際を改めて学習し、学習したことは自分の知識の曖昧部分を修正できよかったという反応であった。しかし、就職後 8 か月以降になるが、業務の中で呼吸音聴取を実施した際に「正常な呼吸音ではないと思うが異常であるも自信を持って言えない」や「先輩たちの申し送りで異常音であるということを言っていたので、それを参考にして聞いている」と回答する者がほとんどだった。「呼吸音を聞いて正常音でないと思うが異常音とも言い切れない、なので先輩に聞いてもらうようにしている」というように、先輩の判断を仰ぎながら、経験則を積み自分の中で呼吸音の性質について徐々に覚えていくという状況であった。

以上の 3 年間の研究から、新人看護師の臨床におけるフィジカルアセスメント技術向上には、新人看護師の所属する部署の先輩看護師のフィジカルアセスメント技術が大きく関与していることが推察された。

しかしながら、フィジカルアセスメントという名称で看護基礎教育を受けていない先輩看護師も多く、それぞれの勤務場所において経験則の中で培ってきたフィジカルアセスメント技術が新人看護師のフィジカルアセスメント技術に影響していると考えられる。そのため、今後は先輩看護師にあたる看護師を対象に、個々に日常業務の中で実践しているフィジカルアセスメント項目の実態を把握すること、実施していきたいと考えているフィジカルアセスメント項目についての考え、さらにはより高度な「状況に合わせた的確な看護判断」をするために必要とされるフィジカルアセスメントに対する要望、等の視点から研究を進める必要があると考え

る。それらを明らかにすることにより、看護師が取得すべきフィジカルアセスメント項目とその技術の習得を進め、より「状況に合わせた的確な看護判断のできる看護師」の育成に看護基礎教育と臨床現場との連携に寄与できると考える。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計１件）

① 城生弘美、馬醫世志子、佐藤晶子、真砂涼子、大野絢子、新人看護師が体験するフィジカルアセスメントに関する認識－バイタルサイン・呼吸器系・循環器系について－、群馬パース大学紀要、査読有、第 11 号、2011、 p 41-47、

６．研究組織
(1)研究代表者
城生　弘美（JONO　HIROMI）
東海大学・健康科学部・教授
研究者番号：60247301

(2)連携研究者
真砂　涼子（MASAGO　RYOUKO）
群馬パース大学・保健科学部・教授
研究者番号：30336531

馬醫　世志子（BAI　YOSIKO）
群馬パース大学・保健科学部・講師
研究者番号：10458474

佐藤　晶子（SATOU　TERUKO）
群馬パース大学・保健科学部・講師
研究者番号：90458472

大野　絢子（OHNO　AYAKO）
群馬パース大学・保健科学部・教授
研究者番号：00251132